

# 御射山遺跡発掘調査報告書

県道払沢富士見線改良事業に伴う  
緊急発掘調査

富士見町教育委員会

## 1 遺跡の環境と調査のあらまし

八ヶ岳西南麓の一画、旧富士見・原・旧金沢の三村が境を接し合うあたりに、諏訪神社上社の摂社である御射山社が位置している。ことに中世、この地は、上社が執り行う年四度の御狩の神事のなかで最も盛大な御射山御狩の祭場であったことが、同時代の文献によって伝えられている。近世をへて今日も、旧暦七月に「原山祭」または「虚空蔵様のお祭」として受け継がれているものである。付近にはそうした往古からの祭事を語るような地名がみられ、近年、中央自動車道の建設に伴って発掘調査された手洗沢・頭股沢・御狩野といった平安時代後期の遺跡が少くない。

この御射山社の境内は南東側を手洗沢・北西側を御手洗川によって区切られている。手洗沢川は瘦せ尾根が発達しているが、御手洗川寄りは沢との比高差があまりなくて浅い窪地状の地形となっている。そして境内から東北方およそ500mのところを、昔「下の横道」とよばれた県道払沢富士見線が横切っている。境内から県道におよぶ長さ750m余、両河川で区切られた幅200m余の範囲が、すなわち御射山遺跡である。境内をのぞむ地籍の大部分は字名を下原山と称し、一部が山林のほかは畠となっており、所謂かわらけなどの散布をみることができる。

今回の発掘調査は、県道改良事業に先立って実施した。調査地点は、県道より御射山社に下



る参道の分岐点から富士見方面へ 80 m おいて現道に沿う幅 2 m・延長 90 m の間である。なお 80 m のあいだは既に地主によって耕土が剥がれ、原状をとどめていないので調査できなかつた。

発掘調査は諒訪建設事務所から富士見町教育委員会が委託を受け、調査団長を名取剛三、発掘担当を武藤雄六・小林公明、調査主任を樋口誠司として、11月5日～13日にかけて行った。

## 2 発掘の状況と遺構

発掘は、あらかじめ設定しておいた  $2 \times 4$  m のグリッドに従い、発掘区の南東側より行った。層序は、上から耕作土層、黒褐色土層、ローム層の順であった。

各土層の堆積状態についてみると、耕作土は 10～15 cm の厚さで平均している。次の黒褐色土は 5～10 cm の厚さで、1 から 8 グリッドまでは浅く、9 から 11 グリッドの間は少し深くなり、12 から 17 グリッドまでは浅く、18 から 22 グリッドにかけては 20～30 cm と厚く堆積している。この層中には、拳大から人頭大の石が多量に混入していて、一部は地表に露出していた。これらの石塊は主として南東側の斜面及び北西側に集中していた。ローム面は平坦でなく、12～15 グリッドの間が小高くなっていて、南東側は緩かに傾斜し、南西側は南東に比べ傾斜がきつい。この層中には拳大の石が多量に混入し、含礫ロームとなっていた。

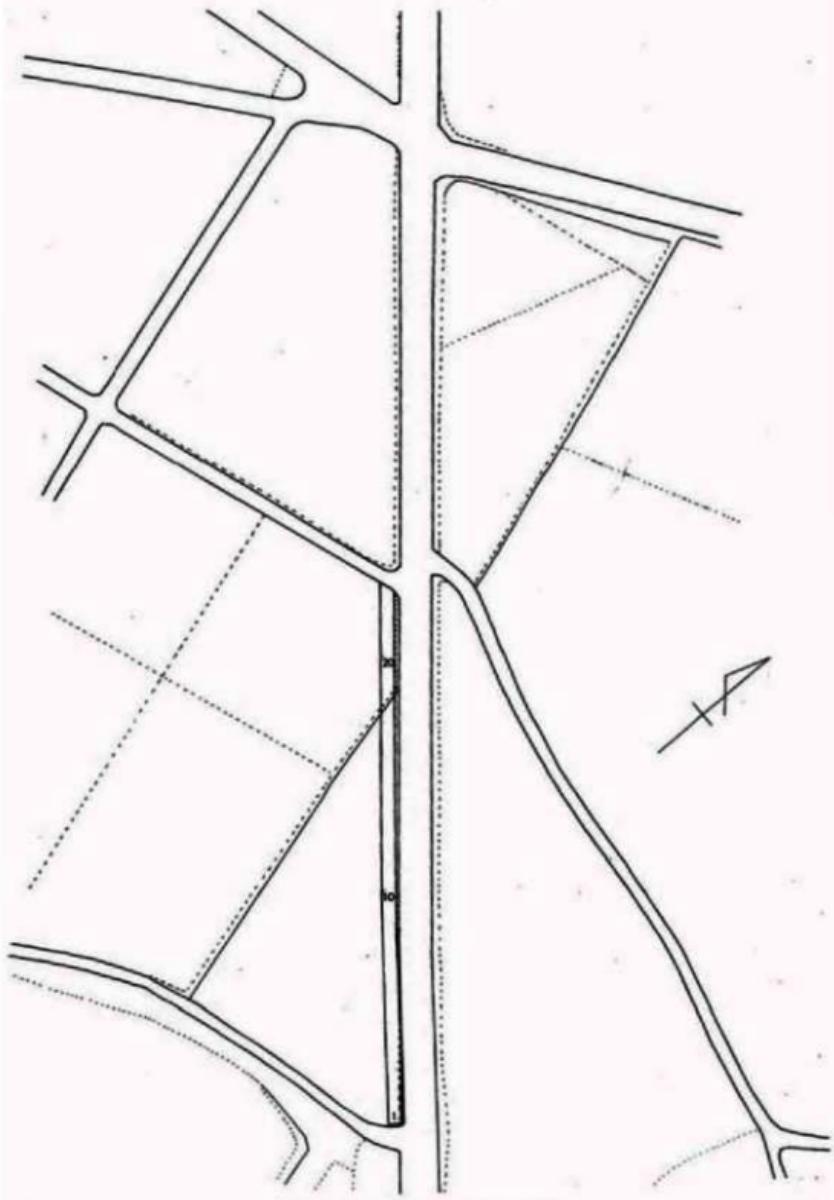
検出した遺構は、陥し穴 1 基、小竪穴 2 基、溝状遺構 1 条である。

陥し穴は、長さ 184 cm、幅 114 cm、深さ 58 cm で平面形は卵形である。長辺には緩い段があり、南側まん中の中段には杭状の小穴がみられ、斜め下方に向いている。底は平で西側へ高くなっていた。

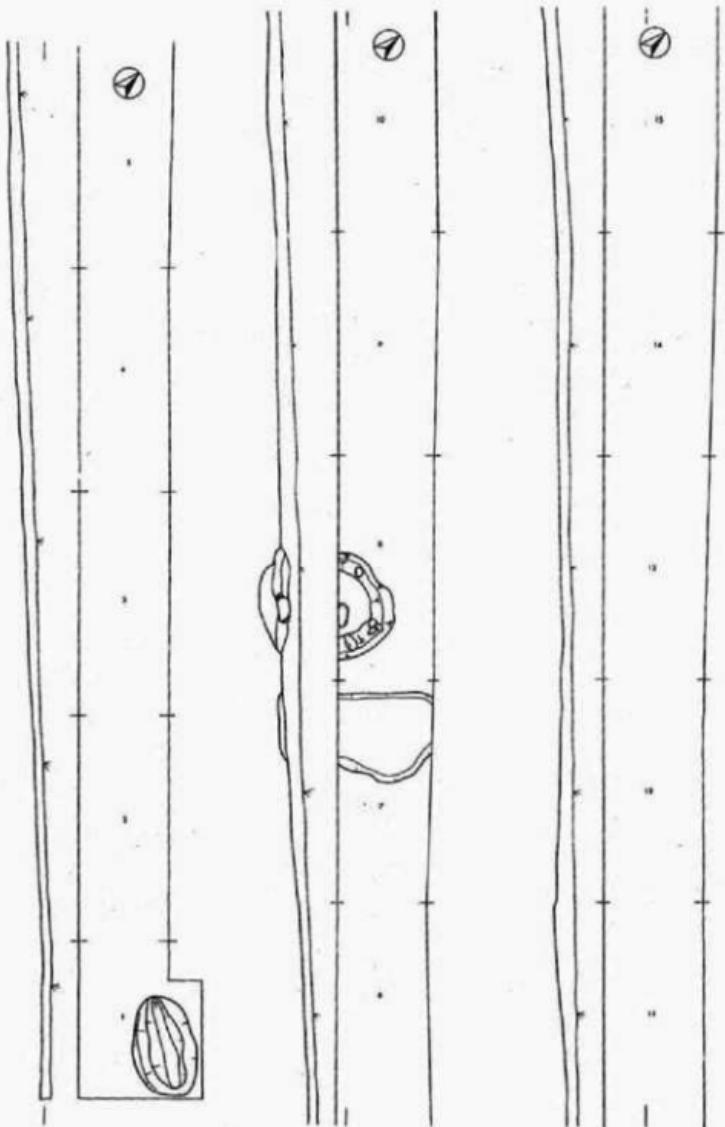
1 号小竪穴は、調査区外に遺構が伸びているため、全体を知ることはできない。平面形は不整の円形を呈するものと思われる。深さは 20 cm で底はタライ状を呈している。穴の上面には、6～8 cm の厚さで穴と同じ範囲に焼土がみられた。小竪穴の堆土は、上面の焼土に伴なうような炭などは見られず、黒褐色土のみであった。

1 号小竪穴は、約半分の調査で全体を知ることはできないが、円形を呈すると思われる。深さは 35 cm を測る。穴の中段には幅 20 cm のテラスが全周しており、拳大の石が数個載っていた。底部は皿状となり、底面は凹凸している。穴の中央には、人頭大の石が平らにあり、その周りには小石が多くみられた。土層は、下から黒褐色土、黑色土、褐色土、耕作土となっていたが、このうち褐色土は捻転した可能性が強かった。

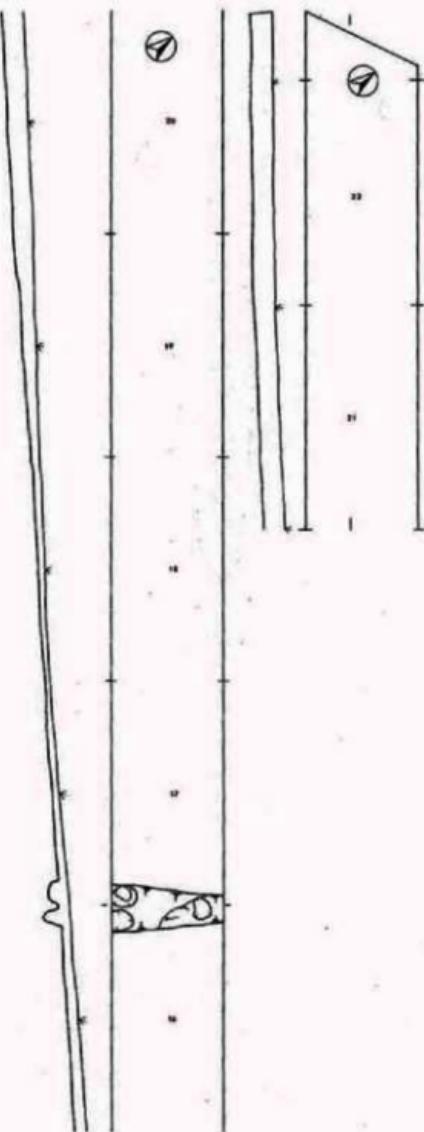
溝状遺構は南北に伸びると思われる。溝の幅は南側で 85 cm、北側で 37 cm、深さ 5～10 cm である。底部は皿状を呈し、ところどころに 10～30 cm の小穴がみられる。堆土は黒褐色のみの单一土であった。



第2図 発掘地点図 (1:1000)



第3図 造構配置図 (1:100)



第4図 遺構配置図 (1:100)

以上が遺構の状態である。どの遺構からも伴出した遺物はなく、時期の決定はできない。

しかし近隣の調査事例から、陥し穴は縄文時代早期のものと一致し、他の遺構は出土した遺物等から判断して、中世のものであると考えられる。

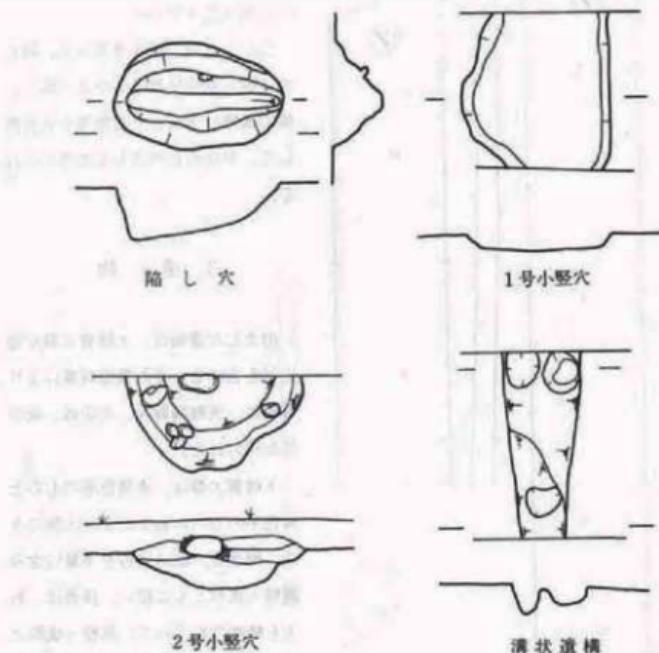
### 3 遺 物

出土した遺物は、土師質土器が殆んどを占める。また表面採集により、青磁片、灰釉陶器片、北宗銭、磁石等が得られた。

土師質土器は、赤褐色系のものと褐色系のものに胎土により大別できる。前者は、胎土に砂を多量に含み、調整・成形とともに粗い。後者は、胎土も精錬されていて、調整・成形ともに入念に作られている。大きさは、底直径6cm前後のものが多く、器高は1cm前後のものが多くみられる。

青磁片は楕の口縁部である。外面には蓮弁文が施され、磁胎には青磁釉が厚くかかっている。

北宗銭は景徳元寶(1005年～)、全体に保存状態がよくない。特に郭及び肌は一部分のみが残存するだけで保存状態はきわめて悪く、四方の銭文は縁にかろうじてついている。北宗銭並に青磁片は、12グリッド西側から表採したものである。



第5図 遺構図 (1:60)

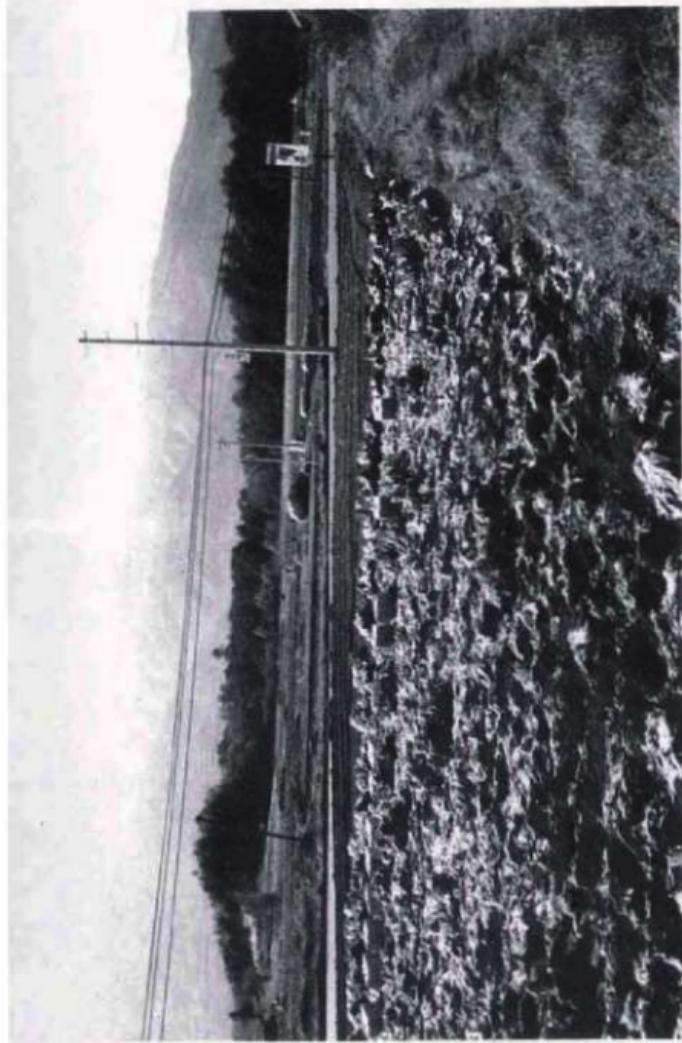
砥石は砂岩製の中砥石で、半欠品である。現長は6cm、幅2.6cm、厚さ1.2cmである。片面のみ使用された片減り砥石である。

#### 4 結 語

今回の発掘は2m幅の線上に限られていたこともあり、本遺跡の性格を証拠だてるほどには至らなかった。しかし、遺跡外縁部の様子の一端をうかがうことはできたといえよう。表面採集とはいって、発掘区のすぐ傍から宗銭と青磁片が見出されたこともひとつの収穫であった。

最後に、発掘作業員の方々および関係者各位に厚く御礼申し上げる次第である。

図版 1



御射山遺跡 中央やや左手が社殿

図版 2

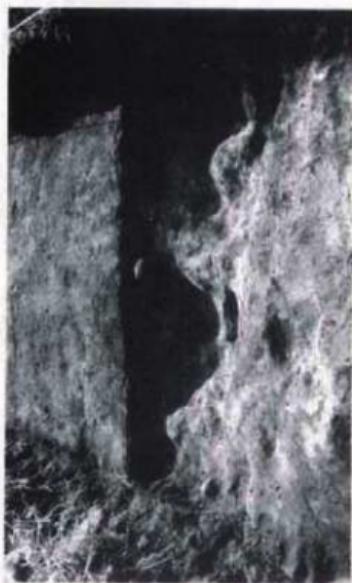


北西側から

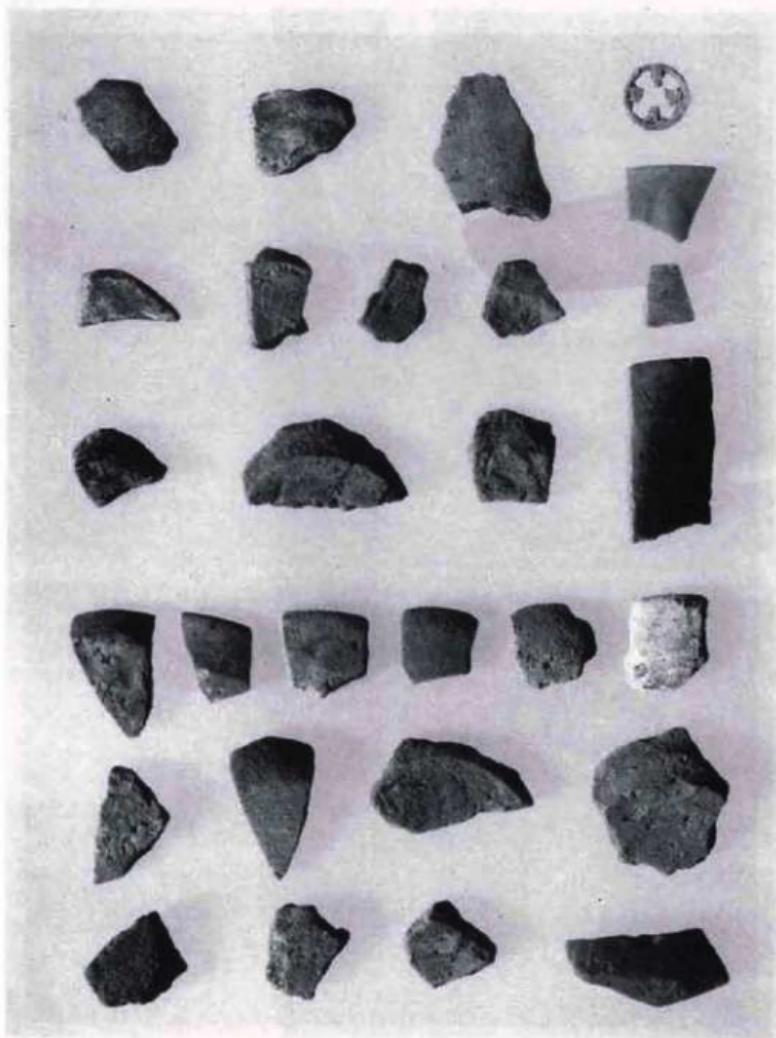


南東側から

発掘区全景



図版4



出土および表採遺物

上段3列：土師質土器片(出土品) 下段3列：土師質土器片(表採品)

上段右列：上から宋錢・青磁片・灰釉陶器片・砾石(表採品)

## 御射山遺跡発掘調査報告書

県道払沢富士見線改良事業に伴う  
緊急発掘調査

昭和60年3月20日

発行 富士見町教育委員会  
印刷 ツカ印刷